6 水田におけるイヌビエ類の密度とクモヘリカメムシ多発生との関係

ねらいと成果

クモヘリカメムシ（以下､クモヘリ）はイヌビエ類などイネ科雑草で増殖することが知られている。平成10年の県北部の水田でイヌビエ類が目立ったので、水田におけるクモヘリの捕獲虫数とイヌビエ類の発生量の関係を調査した結果、両者の間に高い相関が認められた。

内　容

県北部地域において、7月上旬（幼穂形成期～穂ばらみ期）に28か所の水田について、8月中旬（乳熟期以降）に水田とその周辺ほ場について、クモヘリの発生量とイヌビエ類の発生の有無や密度を調べ、両者の関連性を検討した。

7月上旬の調査でクモヘリを認めたほ場は32%で平均虫数は0.32頭（捕虫網10回振り）と多く、クモヘリの発生ほ場の大半はイヌビエ類が発生していた。8月中旬の調査でクモヘリの発生ほ場は43%に増え、平均虫数は1.7頭で、過去10年最高の発生量であった。

クモヘリの発生量とイヌビエ類の発生本数は高い相関が認められ、イヌビエ類が㎡当たり10本程度認められる場合、クモヘリを5頭以上認めた（図参照)。この密度は斑点米を玄米1000粒当たり3粒以上発現させる水準であり、防除を必要とする程度であった。

今後の方針

地域ごとに保全管理水田のイネ科雑草でのクモヘリの生息状況を明らかにし、本田の被害発生との関係を検討する。　　山下　賢一（病害虫防除所）

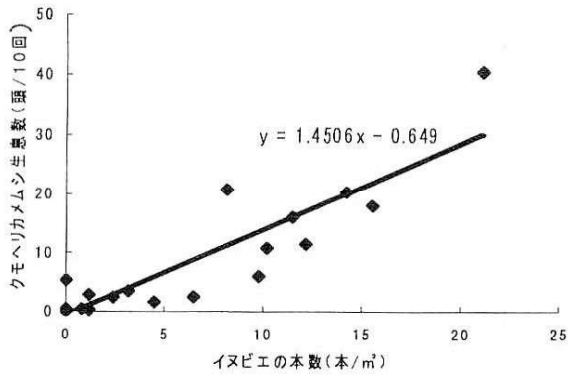

図　ほ場におけるイヌビエ密度とクモヘリカメムシの生息数